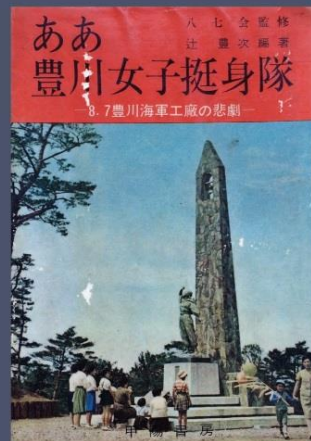


工廠での出来事を後世へ

終戦後の困難な時期を乗り越え、高度経済成長期を迎え世の中が安定し始めた頃、工廠関係者らにより豊川海軍工廠での出来事を後世に伝えるための手記を中心とした書物が刊行されるようになります。金沢市の殉難おとめの像の建立に奔走し、豊川市の平和の像建立を提言した辻豊次氏は、工廠のあらましや石川県出身の女子挺身隊員の手記をまとめた『ああ豊川女子挺身隊』を昭和38(1963)年に出版しました。本書は豊川海軍工廠のあらましを世にしらしめる初めての書物であり、昭和44(1969)年には長野県出身の女子挺身隊員らが結成した豊川二十年会により『胸に穴があいたー女子挺身隊員の記録』が出版されました。機銃部に徴用工として勤めていた地元豊川市の粟生博氏は、戦争体験を次の世代に伝えるため記録を残すことを思い立ち、ほとんど一人がかつての同僚や遺族から原稿を集め、昭和45(1970)年に「こゝにふたゝび」と題し工廠関係者の手記集を出版し、以後14年に渡り手記集の出版に尽力されました。戦後50周年の平成7年には、工廠の設立から壊滅・戦後の出来事など手記も交え体系的にまとめられた、『豊川海軍工廠の記録 陸に沈んだ兵器工場』が八七会により出版されるなど、豊川海軍工廠に関する書物はいくつか出版されており、現在でも豊川海軍工廠の様相を私たちに伝えてくれます。



『ああ豊川女子挺身隊』



粟生博さんが出版した手記集



『豊川海軍工廠の記録 陸に沈んだ兵器工場』